

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：金沢市東山1-38-30・松魚亭

TEL <0762> 52-2271

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 22-2525

会長：依 外代吉 幹事：本岡三千郎

情報委員長：吉田富士夫

1987・11月12日 第353号

英語になった日本語

金沢市立高岡町中学校教諭

若林 忠司氏



「英語の中に定着した日本語」ですが、教材研究に使うと云うことで執筆したんです。

海外で先ず聞くのは、商社マンが根廻しと云う日本語を使っています。建前に腹芸も日本人特有の言葉で、なかなか訳し難い。わしに聞いても解らんと云うがです。それを外人が使うとる。日本人の私が英語で説明出来んのです。弱ってね。苦勞の連続でした。

アメリカでホームステイした時に、ニンジャ・アピアーズ・オンザ・テレビジョンです。子供が忍者と云うとる。私の推測ではいづれ英語になります。それから豆腐。サクラメントのデパートでは菜っ葉と云う表示があった。サンタ・モニカの海岸では、外人が草履はいて歩いとるんです。ゾウリと云うとるんですね。ミスター・アグリ・カルチャルですけど、農協さんも世界に通用しつつあります。

変わったところでは立小便。ユリネーティングと云えばそれまでですが、日本特有のものですわ。それからパチンコにカラオケ。私も瀬川瑛子の「命くれない」が好きで、毎晩聴いとるんですが、シング(Sing)・トウ・ザ・バンド・バイ・カスタマー、お客に合わせて演奏することですわ。

難かしいのでは根付けで、これはフォーリング・ターンズの辞書に載っています。昔、煙草入れに付けた奇麗な彫刻のある。今の中学生に聞いても知りません。採録されても、必らずしも使われない例です。

日本人特有のわび、さび、もののあわれとか、たとえ英語に訳しても外人に理解されにくいでしょうね。独特の感覚ですから。

決論的に云えば、こう云うことでないですか、先ず日本が頑張って経済大国になった。言葉というものは国力の象徴ですね。政治、経済が伸びて日本が海外に識られるほど、本に採録される言葉の数が多くなります。私は教育というものは、教員だけではどうにもならない、複雑な現場ですが、多方面の力を得て、日本人ですからそれを誇りに思い、謙虚な気持で少しでもあちらに受け入れてもらえれば、幸せでないかと思えます。

私ら以上に日本語の上手な外人もいるし、逆に英米人より語学の達者な日本人もいるわけで、お互い切磋琢磨。どこで勝負するかといえば、自分の研究分野でなら外人でも譲る場面もあるでしょう。リスニング、スピーキングではネーチヴに私たちは勝てません。

本当にやるなら向うの厳しい大学へ留学して文化、経済、歴史を勉強する。それで一人前の英語だと思えます。

—金沢北RC例会講話より— (文責 吉田富士夫)

金沢北ロータリークラブの皆様へ

京都洛北ロータリークラブ

会長 田村 昌三



親愛なる金沢北RCの皆様、本意なくも長らく御無沙汰致して居ります。

皆様には益々御清祥にて日々の職務に御精励され、ロータリーに御活躍の御事と、先づはお慶び申し上げます。

我々京都洛北のメンバーも元気で日々頑張っております。秋も漸く深まりましたが、兼六園や犀川や浅野川堤にも秋色一入の風趣と存じ、御地を偲ぶ想い切なるものがあります。京都も錦秋の季節を迎えました。

此の様な当方の想いに合せて頂く様に、此の度「例会時の電話に依る交歓」を企画され、久し振りにて依会長を始め皆様方の御風声に接する事は望外の喜びであります。

貴クラブも10月22日にガバナー公式訪問を成功裡に了えられた事と存じます。御苦勞様でした。これからの日々を益々心豊かにロータリーライフをエンジョイされ、奉仕の理想を推進されん事を遙か京都の地より祈念致します。

交歓例会に寄せて

京都洛北ロータリークラブ

友好クラブ委員長 北濱 清一



本年度の友好クラブ委員長を務めます北濱清一でございます。

会長の挨拶の中にもあります様に、両クラブは創立の時期もほぼ同時期であり、友好締結も、期せずしてスムーズに進められました。全く性格の似た同じ様なクラブであると思えます。

爾来10有余年、変らぬ友好関係が続けられましたのは、前述の如き理事と、会員皆々様の、変らぬご友情の賜と感謝致している次第です。

又今回、飯野健志友好委員長のご提案とご熱意とにより実施されます交歓例会は、両クラブの友好関係に更に新しい一頁を加える新しい試みとして、敬意を表するものであります。

両クラブの友好関係が、今後共親密に末長く続けられます様、心より祈って止みません。今後共宜敷お願い致します。

私のヨーロッパ旅行

飯野 晃子

歌の大好きな私が、小さい頃からあこがれていたイタリア。イタリアの三つの都市を訪れ、同じ国なのに全く違った印象を受けました。ローマはやはり「太陽」という言葉がぴったりで、エネルギーを感じ、フィレンツェは太陽のエネルギーを受け、かつ、太陽にやさしさと美しさを加えた魅力を感じました。しかし、ヴェネチアはその二つの都市とは全く別の、イタリアに限らず、私の見た範囲のヨーロッパの他のどこの街とも違う、まるで別世界、そこにはまるで、百年も二百年も前から何もかわらず、ずっと、そこにそのままあった様な、一種、独特の世界がありました。



アドリア海は「あお」とも「みどり」ともつかず、この世にある色ではあわせない、不思議な色と魅力を持ち、静かに波うちながら、この、ほとんど中世のまま、しかし、少しずつ沈みつつあるこの街を見守っている様でした。

一日中、サン・マルコ広場には、人と鳩が集まり、カフェーでは楽団の演奏が行われ、今にもモーツァルトが妻のコンスタンツェの手をとり踊り出してきそうです。

夕暮れのゴンドラも、大変、趣深いものがあり、ドゥカーレ宮殿と牢獄を結ぶ「ため息の橋」の下をくぐるのはもちろんのこと、ほとんど人が住んでいない、こけむした、古ぼけた建物の間の暗く、細い運河を月明りだけで通り抜け、ゴンドラのかじの出す水音だけが静かにあたりに響きわたる音をBGMに橋を一つくぐり抜けるごとに、私は時間をさか登り、中世へとひき込まれていくのでした。

そんな不思議な魅力にヴェネチアでとりつかれてしまった私はこの一か月以上に及ぶ長旅の間、



私の心はいつもヴェネチアのお姫様の様でした。そして、日本人的視点に立ちつつも、ヨーロッパの人々を知りたいと思いました。ヨーロッパ人の、誰から与えられたものでもなく、自分達の手で地道に創りあげた文化と歴史の重みと、その上に成り立つ世界観に、一種のあこがれさえも抱いてしまうのです。

正直言って、私の過ごした一か月のうち、ホームステイを除いては、国際親善の旅とは胸を張って言えるものではなかったかもしれませんが「今、あなた（の国）のことが知りたい」という気持ちが、国際関係だけに限らず、相互理解の基本的姿勢ではないでしょうか。相手のことを知ろうとせずに自分の事ばかり理解して欲しいと思っても、それは不可能でしょう。私はその事がリアリティーを持って感ずることができました。

最後になりましたが、こんなに素晴らしい思い出と、夢をくださったロータリークラブに深く感謝します。

